

グラバー 図譜

『日本西部及南部魚類』

Fishes of Southern & Western Japan

解説・山口 敦子 (水産・環境科学総合研究科教授)

Yamaguchi Atsuko

〈プロフィール〉

東京大学大学院農学生命科学研究科博士課程修了。2000年長崎大学水産学部准教授。2010年7月から水産学部教授。2011年から現職。博士(農学)。専門は魚類学、水産資源学。主な著書に『干潟の海に生きる魚たち— 有明海の豊かさの危機』(東海大学出版会)、『海藻を食べる魚たち』(成山堂書店)などがある。



コイチ

Nibea albiflora

●画家:長谷川雪香



有明海の美しき貴重種

コイチは、黄金色に輝く美しい魚です。日本南部と中国沿岸の砂泥域に分布します。日本では有明海に特に多く生息し、東シナ海や瀬戸内海のものとは地理的にも遺伝的にも独立していることから、ムツゴロウなどに準ずる有明海の貴重種であると考えられています。美しく上品な肉質はいかにも「金グチ」の呼び名に相応しく、経済価値も高い魚です。同じニベ科のシログチが練り物に加工されることが多いのに対し、コイチは鮮魚として取引されます。秋から冬にかけて旬を迎えるといわれ、刺身、煮物、焼物等の総菜として食卓に上ります。最大で全長50cmを超えることもあり、大型のコイチはさしずめ黄金のスズキ、といったところでしょうか。コイチの漁獲量は激減しており、資源の枯渇が心配されています。

波静かな夏の夜の大合唱

コイチを含むニベ科の魚は総称して「イシモチ」または「グチ」と呼ばれます。イシモチとは、頭部にある耳石がとても大きいことに因んでいます。グチと呼ばれるのは、体内の鰾うぶくわを使って「グツグツ」という音を出す様子が、まるで愚痴を言っているように聞こえるからです。ニベ科を指す英語「croaker」も、コイチを指す中国語「黄姑魚」Huanggufishも、いずれも「ガーガー鳴く魚」を意味するものです。鰾に接する発達した発音筋を備えており、これを振動させると、鰾内の空気を伝わって大きな音が出る仕組みです。しかし、コイチが音を出すのは決して愚痴を言い合うためではありません。鳴くのは



長崎大学附属図書館のホームページでもご覧いただけます。

日本西部及南部魚類【グラバー図譜】

<http://oldphoto.lib.nagasaki-u.ac.jp/GloverAtlas/>

決まって繁殖期だけ、実は愛を語り合っているのです。有明海では波の静かな夏の夜、船上で海底からの大合唱を聞くことが出来たといいますが、今では耳を澄ませてみても、いっこうに聞こえてきません。コイチがすっかり少なくなった証拠でしょうか。

コイチの一生と有明海

有明海のコイチは、有明海内で一生を終えます。5月から8月にかけて有明海奥部と諫早湾の浅海域で産卵し、その稚魚は有明海に注ぐ河川の河口域に現れます。そこは轟音がするほどの速い潮流により常に泥が巻き上がり、濁っています。さぞかし住みにくいのではと想像しがちですが、本当はその逆で、捕食者から身を隠すのに役立つとともに稚魚にとって豊富な餌が提供される素晴らしい揺りかごとなっているのです。コイチの稚魚は潮の流れにあわせて川を上ったり下ったりしながら成長します。冬になり水温が低下すると、成魚とともに徐々に島原半島沖の深みにも生息するようになり、翌年の春まで越冬します。しかし、近年では冬になっても島原沖でコイチを見かけることは少なくなりました。

コイチにとって諫早湾は主要な産卵場の一つであり、そこに注ぐ本明川が同時に存在することが、その再生産に不可欠でした。しかし今、その環境は締切り堤防により失われ、川と海は断絶されてしまいました。コイチのように限定された環境条件にのみ生息できる魚にとって、本来あった環境こそが生存に必要な条件であり、護るべき環境です。コイチが有明海を代表する魚として今後も繁栄し続けることを願いつつ、私たちはその生態の研究を続けていきます。